

# 天心の思い描いたもの ぼかしの彼方へ

■ 2 ■

横山大観は1903年に岡倉天心の勧めで菱田春草と2人でインドに旅行し、翌年に今度には天心に同行し春草らとアメリカへ向かった。米国旅行では、お金がなくなったら絵を描き、それを売りながら旅を続けるつもりで絵絹を持参していた。本作品は、この米国滞在中に描かれ、米国のコレクターが旧蔵していた作品として知られている。

画面には夜空とそこに浮かぶ月、月光に照らし出された波が描か

れているが、まるで船室の小窓から眺めたかのように低い視点から捉えているため、絵を見る者も一緒に波に揺られているかのような

感覚を抱かせる斬新な表現となっている。

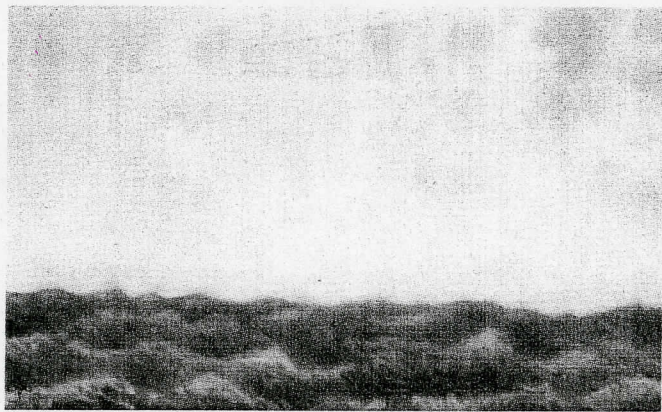
この時期の大観や春草は、新しい時代にあふさわしい絵画を描こうと、それまでの日本の絵画とも西洋の絵画と

## 低い視点で斬新な表現

も異なる新しい表現を追求していた。しかし、表現には、色が濁るとれ顧みられなかった。一方、米国で開いた

ヨンとによる大観らの「朦朧体」と批判さ

横山大観「海一月あかり」1904年、絹本・彩色・額装、福井県立美術館蔵



「天心の思い描いたもの」ぼかしの彼方へ」は21日まで、県近代美術館で開催。問い合わせは同館 ☎ 029 (243) 5111。

「天心の思い描いたもの」ぼかしの彼方へ」は21日まで、県近代美術館で開催。問い合わせは同館 ☎ 029 (243) 5111。

任学芸員 今瀬佐和